昭和63年度

大分県内遺跡詳細分布調査概報 8

仮宮遺跡　長野前遺跡・カヂヤゾノ遺跡
吉松遺跡D地区　塩屋遺跡
上田ヶ森遺跡　喜福寺遺跡・下堀田遺跡
鴨川遺跡　小迫辻原遺跡
綱井下平遺跡

平成元年3月

大分県教育委員会

例　言

1．本書は大分県教育委員会が昭和63年度国庫補助金を得て実施した農業基盤整備事業に伴う、事前の分布調査及び試掘調査の概要報告である。

2．調査の実施にあたっては、大分県農政部、各市町村教育委員会の協力を得た。

3．調査体制は次のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会

調査委員　賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学長）
小代基雍（大分県教育委員会管理部文化課長）
後藤宗俊（　同　課長補佐）

調査主任　清水宗昭（大分県文化課埋蔵文化財第１係長）

調査員　小倉正五（宇佐市教育委員会社会教育課）
佐藤良二郎（　同　）
土居和幸（日田市立博物館）
坂本嘉弘（大分県文化課主査）
牧尾義則（　同　主査）
高橋信武（　同　主任）
宮内克己（　同　主任）
栗田勝弘（　同　主任）
西　哲弘（　同　主任）
綿貫俊一（　同　主事）
丸山啓子（　同　嘱託）
平川信哉（　同　嘱託）

なお、試掘調査の実施にあたっては、とくに三光村教育委員会、宇佐市教育委員会、杵築市教育委員会、国東町教育委員会、日田市教育委員会等の協力を得た。記して謝意を表したい。

4．本書の執筆は各調査担当者が分担し、編集は清水と牧尾があたった。

5．遺物の整理は調査員のほか、松沢恵美子があたった。

目　次

Ⅰ．調査の経緯 …… 1
Ⅱ．分布調査の概要 …… 7
Ⅲ．試掘調査の概要 …… 9
　1．仮宮遺跡 …… 9
　2．吉松遺跡D地区 …… 10
　3．上田ヶ森遺跡 …… 12
　4．鴨川遺跡 …… 14
　5．綱井下平遺跡 …… 15
　6．長野前遺跡・カヂヤゾノ遺跡 …… 18
　7．塩屋遺跡 …… 19
　8．喜福寺・下堀田遺跡 …… 21
　9．小迫辻原遺跡 …… 25
Ⅳ．まとめ …… 27

I　調査の経緯

昭和63年度の調査については、県農政部との事前協議によって事業予定地を検討し、(1)周知遺跡にかかるもの、(2)遺跡の可能性のあるもの、(3)その他と分け、分布調査を実施した。その対象となった箇所は県下125ヶ所に及んだ。

分布調査は例年のように、5月～7月にかけて実施し、とくに周知遺跡にかかる等の問題のある地区については市町村教育委員会及び農政担当部局と現地協議を行なった。

分布調査の結果、さらに(1)周知遺跡にかかる地区、(2)遺跡の所在が確認された地区、(3)地形等から遺跡の可能性のある地区、(4)特に問題のない地区、に分けた。この結果をふまえ、原則として(1)・(2)については試掘調査を実施するようにし、事前に遺跡の範囲等の確認調査を行うようにした。(3)については、試掘もしくは立合い調査を実施した。

主要な試掘調査は次のとおりである。

仮宮遺跡	下毛郡三光村八面山中部工区（県営圃場整備事業）
吉松遺跡	宇佐市吉松工区（県営圃場整備事業）
上田ヶ森遺跡	速見郡山香町立石地区（地域改善対策事業）
鴨川遺跡	杵築市溝井地区（県営圃場整備事業）
網井下平遺跡	東国東郡国東町国東南部網井地区（県営圃場整備事業）
長野前遺跡・カヂヤゾノ遺跡	東国東郡国東町来浦地区長野工区（県営圃場整備事業）
塩屋遺跡	東国東郡国東町富来南部地区（県営圃場整備事業）
喜福寺遺跡・下堀田遺跡	東国東郡国東町富来（県営圃場整備事業）
小迫辻原遺跡	日田市小迫辻原地区（地力増進事業）

これらの調査実施地区の中で、仮宮遺跡、鴨川遺跡、塩屋遺跡、喜福寺遺跡、小迫辻原遺跡については、一部遺物の包含等が認められたものの、盛土等の工法変更によって保存を図ることにした。吉松遺跡D地区、上田ヶ森遺跡、網井下平遺跡、カヂヤゾノ遺跡、下堀田遺跡については、農政部局と協議を行ない、各市町村教育委員会が主体となって事前の発掘調査を実施した。　（清水）

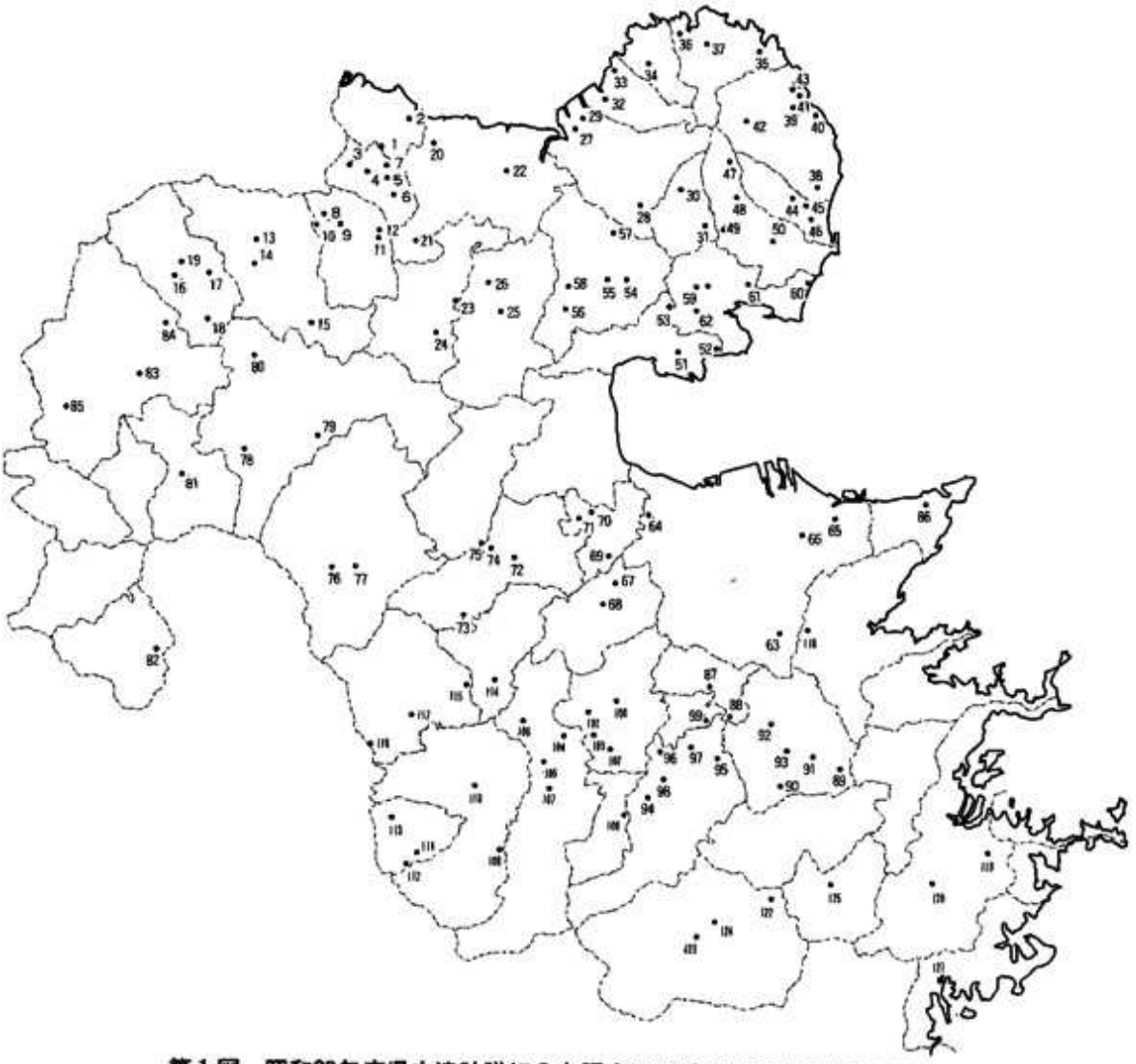
昭和63年度農業関係開発事業に伴う埋蔵文化財分布調査地区一覧表

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
1	中津市	羽の上工区	4.2	土地改良総合整備
2	中津市	中津東部工区	28.0	農業生産体質強化
3	三光村	八面山西部工区	—	県営圃場整備事業
4	三光村	八面山中部工区	22.0	〃
5	三光村	八面山東部工区	20.0	〃
6	三光村	長谷工区	2.1	農村総合整備
7	三光村	西秣地区工区(秣地区)	0.6	農村地一体開発整備パイロット事業
8	本耶馬溪町	本耶馬中部工区	3.00	県営圃場整備
9	本耶馬溪町	本耶馬東部工区	5.0	〃
10	本耶馬溪町	多志田工区	3.5	土地改良総合整備
11	本耶馬溪町	屋形工区	3.0	新農構
12	本耶馬溪町	椿工区	3.0	地域農業拠点整備
13	耶馬溪町	耶馬溪中部工区	9.0	県営圃場整備
14	耶馬溪町	樋山路工区	4.0	土地改良総合整備
15	耶馬溪町	百谷工区	1.7	新農構
16	山国町	山国工区	6.0	県営圃場整備
17	山国町	奥畑工区	1.7	第三期山村振興農林漁業対策
18	山国町	草野河内工区	1.7	〃
19	山国町	高田工区	3.7	地域農業拠点整備
20	宇佐市	上敷田工区	10.0	農業生産体質強化(地力増進)
21	宇佐市	床並工区	2.0	第三期山村振興農林漁業対策
22	宇佐市	駅館川工区	—	県営圃場整備
23	院内町	上納持工区	—	地域改善対策
24	院内町	院内南部工区	8.0	県営圃場整備
25	安心院町	松本川工区	4.0	〃
26	安心院町	新貝川工区	14.0	〃
27	豊後高田市	並石工区	14.0	〃
28	豊後高田市	真中工区	6.0	〃
29	豊後高田市	並石南部工区	15.0	〃
30	大田村	田原工区	11.0	〃
31	大田村	朝田工区	9.0	〃
32	真玉町	真玉工区	6.0	〃

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
33	真玉町	白野工区	1.3	土地改良総合整備
34	香々地町	香々地工区	10.0	県営圃場整備
35	国見町	国見東部工区	12.0	〃
36	〃	国見西部工区	12.0	〃
37	〃	国見中部工区	8.0	〃
38	国東町	国東南部工区	12.0	〃
39	〃	富来工区	17.0	〃
40	〃	富来南部工区	7.0	〃
41	〃	来浦工区	13.0	〃
42	〃	成仏工区	3.1	土地改良総合整備
43	〃	クグツ工区	2.7	農村総合整備
44	武蔵町	武蔵工区	5.0	県営圃場整備
45	〃	武蔵東部工区	9.0	〃
46	〃	武蔵南部工区	20.0	〃
47	安岐町	両子工区	13.0	〃
48	〃	朝来工区	13.0	〃
49	〃	橋上地区工区(山浦地区)	1.0	農林地一体開発整備パイロット事業
50	〃	山浦工区	4.8	地域農業拠点整備
51	日出町	日出東部工区	17.0	県営圃場整備
52	〃	八代工区	12.1	土地改良総合整備
53	〃	日出東部工区	3.0	新農構
54	山香町	山香工区	5.0	県営圃場整備
55	〃	山香第2工区	7.0	〃
56	〃	山浦工区	5.0	〃
57	〃	立石工区	—	地域改善対策
58	〃	下工区	5.0	第三期山村振興農林漁業対策
59	杵築市	溝井工区	8.0	県営圃場整備
60	〃	奈狩江工区	5.0	〃
61	〃	藤の川工区	4.0	土地改良総合整備
62	〃	八坂工区	5.6	新農構
63	大分大分市	吉野工区	8.0	県営圃場整備
64	〃	宮苑工区	1.9	土地改良総合整備

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
65	大分市	久土工区	3.0	土地改良総合整備
66	〃	丹生工区	3.6	農村基盤総合整備
67	野津原町	野津原北部工区	9.0	県営圃場整備
68	〃	野津原中央工区	5.0	新農構
69	挾間町	谷工区	9.0	県営圃場整備
70	〃	詰工区	2.6	土地改良総合整備
71	〃	挾間西部工区	3.2	新農構
72	庄内町	南庄内工区	6.0	県営圃場整備
73	〃	阿蘇野工区	14.0	〃
74	〃	西庄内工区	3.0	農村基盤総合整備
75	湯布院町	下湯の平工区	0.7	〃
76	九重町	飯田西部工区	3.4	新農構
77	〃	飯田工区	3.5	〃
78	玖珠町	玖珠工区	25.0	県営圃場整備
79	〃	綾垣工区	2.9	第三期山村振興農林漁業対策
80	〃	山中工区	3.3	
81	天瀬町	天瀬町工区	1.8	農村地域定住促進対策
82	上津江村	若林工区	0.3	新農構
83	日田市	諸留工区	4.2	農地開発利用促進
84	〃	伏木工区	2.8	土地改良総合整備
85	〃	羽田工区	1.8	〃
86	佐賀関町	佐賀関工区	7.0	農村総合整備
87	犬飼町	柴北工区	17.0	新農構
88	〃	大寒柚野木工区	20..0	県営圃場整備
89	野津町	野津東部工区	6.0	農業生産体質強化
90	〃	南野津工区	3.7	県営圃場整備
91	〃	川登工区	1.0	土地改良総合整備
92	〃	野津工区	3.2	〃
93	〃	野津南部工区	2.3	農村総合整備
94	三重町	三重西部工区	—	県営圃場整備
95	〃	三重東部工区	—	〃
96	〃	三重地区工区(向野団地)	7.4	農地総合開発整備

番号	市町村名	工区名	工事面積(ha)	事業名
97	三重町	三重工区	4.3	新農構
98	〃	三重西部工区	20.0	農業生産体質強化
99	千歳村	柴山工区	4.0	農村総合整備
100	大野町	大野東部工区	4.0	県営圃場整備
101	〃	大野西部工区	3.0	〃
102	〃	中原工区	1.7	土地改良総合整備
103	〃	大野西部工区	0 50..	農業生産体質強化
104	朝地町	市万田池田工区	13.0	県営圃場整備
105	〃	朝地工区	7.0	〃
106	〃	朝地町梨山工区	12.0	農業生産体質強化
107	緒方町	上緒方工区	20.0	〃
108	清川村	清川村東部工区	30.0	〃
109	竹田市	宮砥工区	10.0	県営圃場整備
110	〃	飛田川地区工区(平I区)	1.2	県営農地開発
111	萩町	柏原工区	—	県営圃場整備
112	〃	柏原第二工区	—	〃
113	〃	萩工区	3.0	〃
114	直入町	長湯工区	10.0	〃
115	久住町	栢木工区	8.0	〃
116	〃	白丹工区	9.0	〃
117	〃	久住工区	10.0	〃
118	白杵市	吉小野工区	3.0	〃
119	佐伯市	木立工区	13.0	〃
120	〃	上黒沢工区	2.3	土地改良総合整備
121	蒲江町	森崎工区	6.2	〃
122	宇目町	年目工区	13.0	県営圃場整備
123	〃	小野市工区	6.0	〃
124	〃	小野市工区	4.5	新農構
125	直川村	直川工区	10.0	県営圃場整備



第１図　昭和63年度県内遺跡詳細分布調査及び試掘調査対象地位置図

II. 分布調査の概要

分布調査は、年度当初に県農政部との協議にもとづき、年度内に施行が予定されている農業関係開発事業地区を対象とした。第1次の分布調査は主として5月から7月にかけて、県内の対象地区約125ヵ所を踏査した。第2次の試掘調査は、分布調査によって発見された遺跡及び、地形等から遺跡が推定される地区について実施した。また併行して11月以降の工事施行区については立ち合い調査を行った。

以下の表は、分布調査の結果にもとづいた調査別の一覧である。（清水）

1．周知遺跡が所在する地区

市町村名	事業名	工区名	遺跡名	備考
中津市	土地改良総合整備	洞ノ上工区	洞ノ上遺跡	
宇佐市	県営圃場整備	駅館川工区(大規模幹線)	吉久遺跡	
豊後高田市	県営圃場整備	真中工区	上野条里遺跡	
国東町	県営圃場整備	来浦工区	長野遺跡	
日田市	土地改良総合整備	諸留工区	諸留遺跡	
竹田市	畑地帯総合土地改良	池辺工区	ヤトコロ遺跡	
清川村	農業生産体質強化	上緒方工区	柿木原遺跡	事業なし
直入町	県営圃場整備	長湯工区	前田遺跡	
大分市	土地改良総合整備	久土工区	久土遺跡	市単費事業

これらの中で、国東町については大分県教育委員会が対応し、他については、各市町村教育委員会が国庫補助事業ほかで対応した。

2．分布調査の結果、遺跡の可能性のある地区

市町村名	事業名	工区名	備考
三光村	県営圃場整備	八面山中部工区	
豊後高田市	県営圃場整備	並石南部工区	
国東町	県営圃場整備	国東南部(網井)工区	要本調査
国東町	県営圃場整備	富来(塩屋)工区	要本調査
国東町	県営圃場整備	富来(富来)工区	
杵築市	県営圃場整備	溝井工区	

市町村名	事業名	工区名	備考
大分市	県営圃場整備	古野工区	
大分市	農村基盤総合整備	丹生工区	
天ヶ瀬町	新農構	天ヶ瀬町(本城本村)工区	
日田市	小規模排水	内河野工区	
犬飼町	県営圃場整備	柴北工区	
千歳村	農村総合整備	柴山工区	
竹田市	県営圃場整備	宮砥工区	
竹田市	畑地帯総合土地改良	久保工区	
荻町	県営圃場整備	柏原(北原)工区	事業なし
荻町	県営圃場整備	荻工区	
荻町	畑地帯総合土地改良	荻工区	

これらの中で、三光村、国東町、杵築市については大分県教育委員会が対応し、その他については、各市町村教育委員会が対応した。

3．周辺の遺跡の分布状況や地形的な状況から、立合い調査を必要とする地区。

市町村名	事業名	工区名	備考
本耶馬渓町	土地改良総合整備	多志田工区	
耶馬渓町	県営圃場整備	耶馬渓中部工区	
香々地町	県営圃場整備	香々地工区	
国見町	県営圃場整備	国見西部工区	
武蔵町	県営圃場整備	武蔵南部工区	
安岐町	小規模排水	山口工区	
大野町	県営圃場整備	大野東部工区	
臼杵市	県営圃場整備	古小野工区	
蒲江町	土地改良総合整備	森崎工区	
宇目町	県営圃場整備	宇目工区	

これらについては、発掘調査を要する遺跡は発見されなかった。

Ⅲ. 試掘調査の概要

1．仮宮遺跡（下毛郡三光村大字田口）

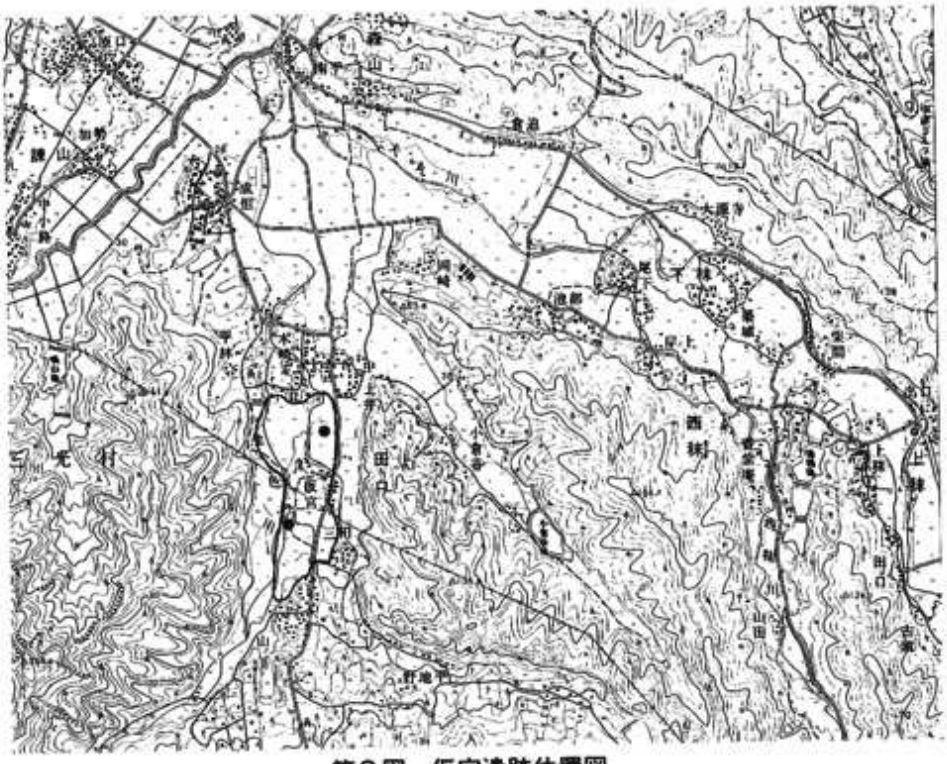
立地と環境

県営圃場整備事業の八面山中部地区として実施された三光村田口地区は、南側にそびえる標高512.3mの八面山につつまれるように立地している。工事の対象となった水田はこの八面山から延びる尾根上の台地で、東側を流れる三田川西側を流れる金色川に狭まれ、標高は60m～40mである。この２つの河川は合流し、やがて犬丸川となり周防灘に注いでいる。

調査の方法と経過

分布調査は昭和63年５月に実施したが、それまでは、遺物の散布などは認められず、周知遺跡ではなかった。しかし、この分布調査の際、その立地や、工事予定地の中央部に、この地区の祭の時に使用する「オタビショ」と呼ばれる「みこし」の中継所となっている神社があることなどから、工事中に遺跡が発見される可能性が強いことが予想された。さらに地元の研究者から、工事予定地内に「南地坊」と呼ばれる「寺社」にかかわる地名の部分が含まれることや、石塔類などがあり、調査実施の依頼もあった。

試掘調査は、2m×5mの調査区を削手を受ける部分を中心に任意に設定し、掘り進むこととした。まず、工事予定地の中央部付近の「オタビショ」を付近から調査を開始した。その結果、神社の南側で、



第２図　仮宮遺跡位置図

中世の土師質土器や瓦器が出土し、さらに南の最高所からは石匙が出土した。しかし、神社の北側は削平を受けているため遺構、遺物の出土はなく、表土下に粘質の赤褐色二層が露出した。またこれより北側の仮宮地区の北側では土師器・須恵器・瓦器などが出土したが、包含層状になっており、遺構は検出されなかった。さらにこの地区の西側は氾濫原となっており、表土下に礫層が出土した。

まとめ

八面山中部地区の試掘調査は結局約30haの工事予定のうち、削平を予定されている部分を中心に、55ヵ所を試掘した。その結果、縄文時代の石匙、弥生時代中世の土器などが出土した。問題となった地区は神社の南側と、仮宮地区の北側である。前者の地区は中世の遺物を中心に出土したが、工事計画をみると盛土部にあった。また後者の地区は地表から包含層までが深く、しかも平坦で削平はほとんど行なわないとのことであった。そこで、農政部関係者と工事関係者と上記のことを現地で確認し、工事に着工した。（坂本）

2．吉松遺跡D地区（宇佐市大字吉松）

調査に至る経過

宇佐市吉松地区において本年度の圃場整備事業が実施されることになった。計画地内に周知遺跡は存在しなかったが、かって畠地であった微高地などに良好な立地条件をなす場所があったため、事業主体者の大分県駅館川総合開発事業事務所と県文化課・市教委の協議により、事業主体者負担の事前調査を行うことにした。

その結果、予想どおり約10,000m²の微高地上（A～C地区）において、6C～7C初頭の竪穴式住居跡群と掘立柱建物群8C末～9C初頭・12Cの掘立柱建物群、室町時代の現地火葬墓・骨蔵器群などが確認された。

この調査中、共同墓地の東側において幅約3m、長さ約60mのL字状の溜め池が存在することが明らかになった。内側には土塁状の土盛りも確認された。形状の特徴からこれは中世の居館を構成する堀と土塁と推定された。しかしこの遺構については協議の対象になっていなかったため、大分県教育委員会が確認調査を実施することにした。

宇佐市では近年、市内の各地において中世の居館や壊館跡の発掘調査例が増加しつつある。これを契機に文献・史料の調査、および現地踏査を行った結果、史料上に見えるもの、あるいは現地踏査で堀や土塁が遺存している「城館」などが今日の大字単位ほどの分布状況を示していた。それらは在地支配を行う勢力者との関係が考えられるものが多い。ところで中世文書によれば、当地区には吉松を苗名とする宇佐大宮司家の一流があったことがしられており、「吉松城」の名称も見える。L字状の堀と土塁はこうした史料との関係からも注目された。現地踏査で確認される市内各地の城館に関する遺構は、堀・土塁であるが、既述したように吉松地区共同墓地の東側の溝と堀もこれに類似するもので

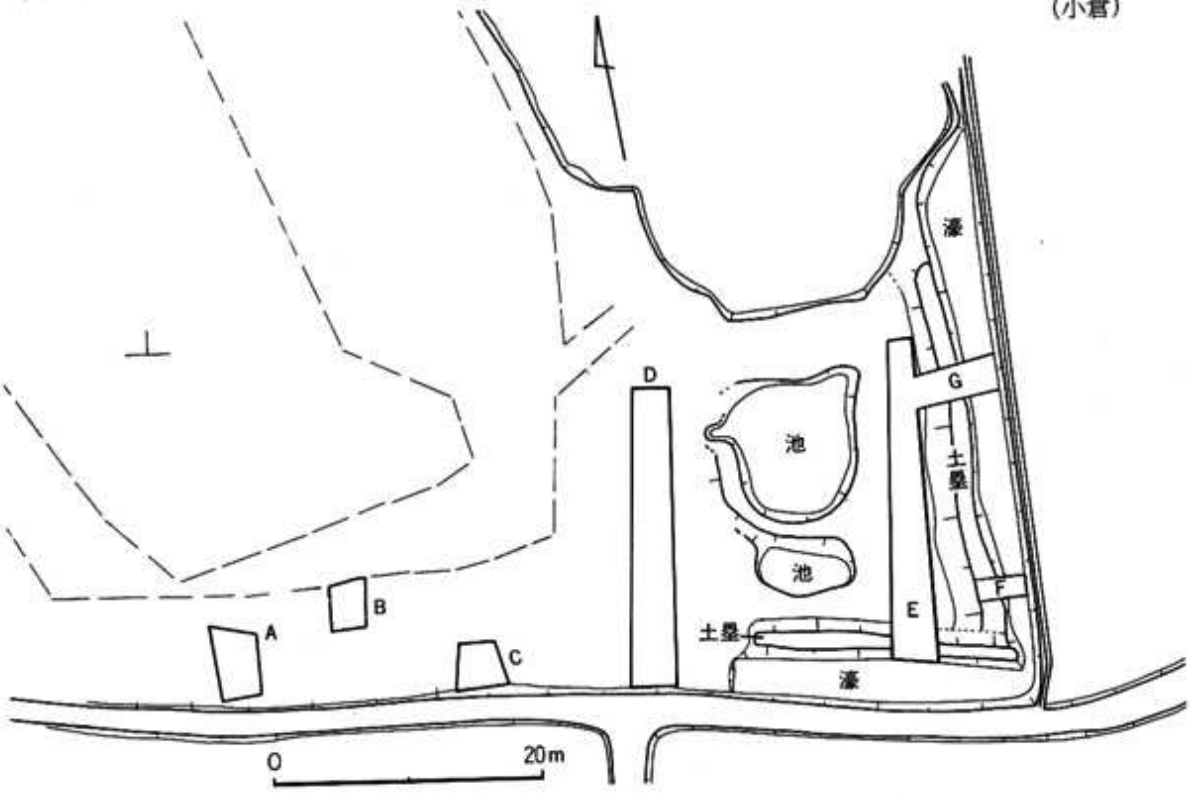
あった。問題はそれらがL字状であり、館を囲む全周に及んでいないので、城館の遺構と断定することはできない。そこでこれをD調査区として溝状遺構の探索と内部の建物群の確認を目的とした試掘調査を行った。

まず、ユンボによってL字状溝の両端部の状態を確認したが、いずれも地上で確認できる部分で終わっていた。また内側の雑木林を伐採して試掘を行ったが、遺構や遺物は全く発見できなかった。そこには新しいと思われる小さな溜め池が掘られていた。内側に遺構が存在しなかったので、念のため東側の水田地帯にも調査を展開して、L字状の溝状遺構の性格究明に努めた。しかし、そこにおいても遺構らしきものは全く検出されなかった。以上により、L字状の溝と土塁は中世の城館の遺構ではなく、溜め池である可能性が高いと判断されることになった。何故このような形状の池を掘ったか不明であるが、地区の古老によれば、この池は子供のころから既に存在していたということである。

少林寺境内に古墓群からなる墓地があり、現在使用されていない。ここには墓域内の単位を区切る土塁状土盛りと溝状の窪みが残っている。D地区の墓地には、「文化」「文政」などの銘をもつ古墓から現在にいたるまでの墓があり、前者に比べ規模も大きい。L字状の堀と溝は、あるいはこの墓地と農地を区切るためにつくられたのかも知れない。

今回の調査によって、「吉松城」に関する資料は明確にできなかったものの、周辺には古墳・奈良時代の集落跡や由緒ある神社や寺院などが集中しているので、有望な地域として留意する必要がある。

（小倉）



第3図　吉松遺跡D地区試掘調査区（A～G）位置図

3．上田ヶ森遺跡（山香町大字立石）

位置と環境

本遺跡は、速見郡山香町大字立石字上田ヶ森に所在する。

立石地区は、山香町の北に位置し、国道10号線をはさみ、北は標高200m～400mの急峻な丘陵が連らなり、南は標高200m～300mの北側に緩傾斜する。また、現場には1m×1.5m程の安山岩製の石が立石しており、この立石から当地区が「立石」と呼ばれるようになったと伝承されている。

立石周辺の遺跡分布状況を観ると、日豊本線立石を境に、北には②の立石陣屋跡、南の標高288mの城山に中世山城（城山城跡）が位置する。調査は、県営圃場整備事業に伴うもので、工事中に組合わせ式箱式石棺一基が発見され、これを中心に県教育委員会では約250 mの範囲を対象として、緊急発掘調査を実施した。

調査区近景（南西）より

石棺出土状況（南）より

調査の概要

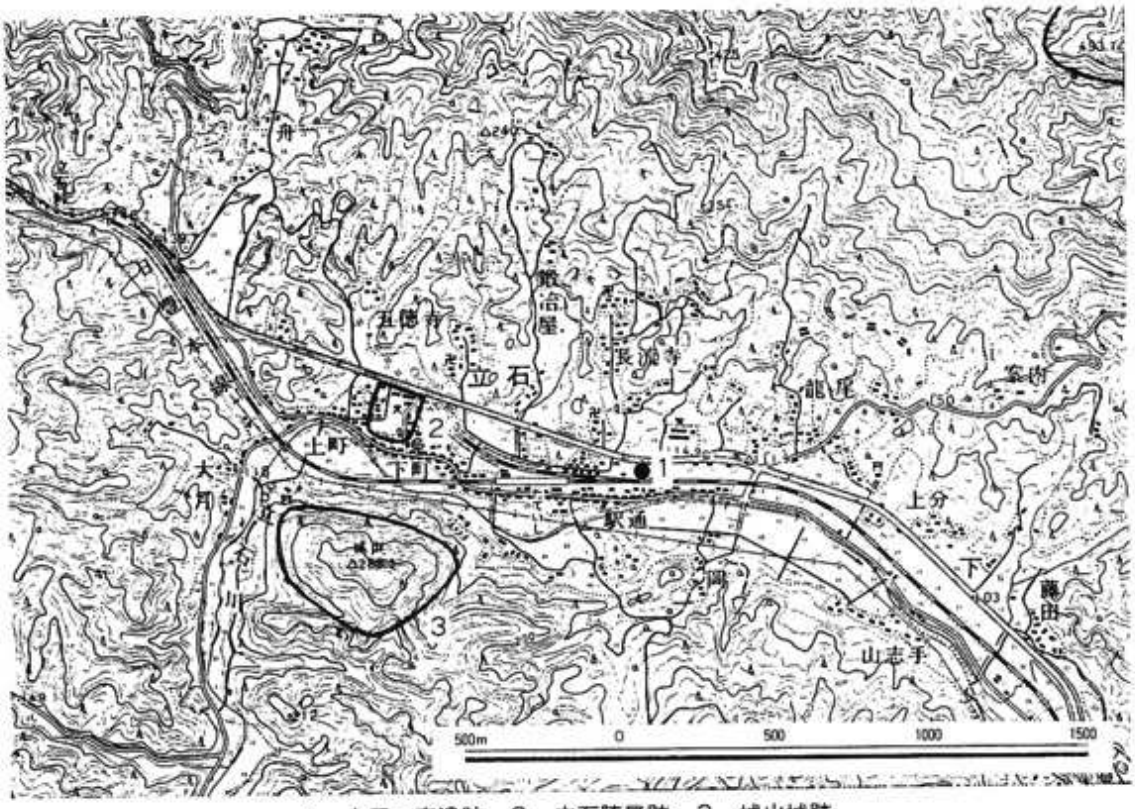
石棺は当初一基とされていたが、その後の調査で、さらに南約３ｍの位置に一基存在することを確認した。これらは二基共に古墳時代の石棺と考えられる。

北側石棺は、工事により石蓋を全て欠き、半壊状態にあった。石棺の主軸は東西に位置し、長さ約2.2m、幅0.6mを測る。またこの石棺は安山岩製の箱式石棺である。石棺内部の東小口石から約10cmのところに、長さ約30cm×40cmの板石が１枚、約20cm×30cmの板石がその上に２枚(共に厚さ約６cm)組み合わせた枕石がある。また石棺内中央部北側側壁で刀子が１点のみ出土している。

また南側石棺は、地元関係者の発議により現状のまま完全保存されることとなり、今回は可能な範囲内での調査にとどまった。この石棺は鎧重の蓋石をもつ箱式石棺で、石材は安山岩製であり、主軸は東西に位置し、長さ約２ｍ、幅１ｍを測る。

また、調査範囲内で北東部にあたる場所に攪乱とみられる弥生時代中期の甕、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての坏、中世の土器片等が出土している。（丸山）

地域名の由来となる「立石」



１．上田ヶ森遺跡　２．立石陣屋跡　３．城山城跡

第４図　上田ヶ森遺跡位置図

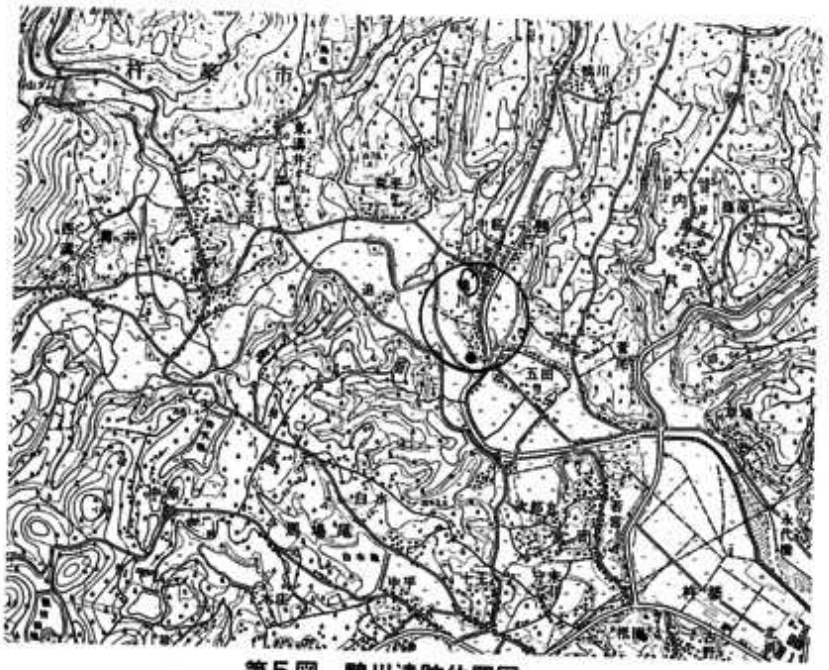
4．鴨川遺跡（杵築市大字鴨川）

はじめに

昭和62年度、県内群細分布調査を実施した際、杵築市大字鴨川字山迫で縄文時代後期の貝塚を確認した。その地理的な位置は、杵築市街地の北側を流れる高山川が、河口から3kmのところで溝井川と合流する。貝塚はこの合流点に立地し標高約7mである。地名から山迫貝塚としたこの貝塚はすでに昭和61年度の圃場整備事業により全壊状態であった。しかし貝層や包含層の一部がブロックで残っており、その中から大量の遺物が出土した。今回の圃場整備事業計画は、この山迫貝塚を見おろす台地上の水田が予定された。この台地は東側を高山川、西側を溝井川が流れ、その間の標高約20mの南向きの台地である。このような周辺の状況であるため、遺跡が存在する可能性が高いと思われ、事前の試掘調査を実施することにした。

調査の方法と経過

調査は台地上の工事により削平を受ける水田に任意、2m×5mの調査区を設定した。最終的には調査区の数は25ヵ所にのぼった。その結果、工事計画予定地の北部地区である台地の最高所周辺は、耕作土下に拳大の礫が混入した台地の基盤となっている砂礫土があらわれる。そして台地の南端部に近づくにつれ、耕作土下に黒色土が確認され、次第に厚さを増す。遺構は一部で旧水田の畦畔と関連すると思われる石列や、柱穴状の掘り込みが検出された。そこで、一部調査区の拡張を行ない、遺構の性格の解明に務めた。また遺物は、染付のある陶片、糸切底のある土師器の小皿・瓦器・弥生後期や中期の土器片が僅ながら出土したが、何れも小破片で磨滅している。更に姫島産黒曜石の小破片も出土した。



第5図　鴨川遺跡位置図

まとめ

杵築市鴨川地区の圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、当初縄文時代の貝塚が存在することや、周辺を小河川が流れる南向きの台地という立地などの諸条件から遺跡の存在が予想された。しかし、調査の結果いくつかの遺構や遺物が出土したものの、大部分は現水田の開田の際の削平を受けたものと思われ遺存状態が良くなかった。

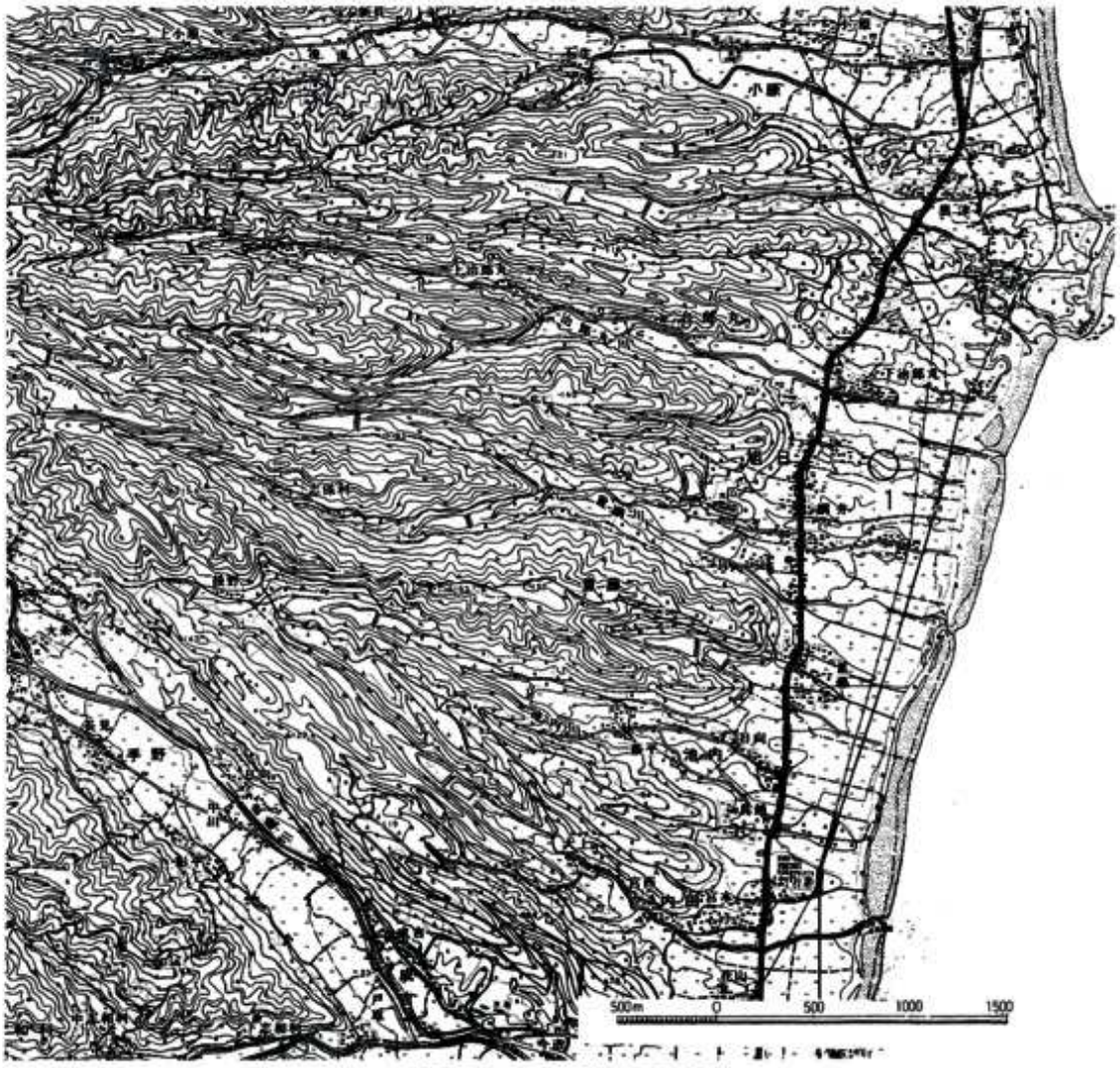
（坂本）

5．網井下平遺跡（東国東郡国東町大字旭日字下平）

遺跡は、国東半島東側の国東町南部に位置する。国東半島中央部の両子山付近から延びてくる丘陵の一つに立地する。立地する丘陵の北側、南側の谷は水田として利用されている。標高約10m前後で、東にラグーンの水田地帯・砂丘（網井砂丘遺跡）を臨むところにある。(第６図１。)

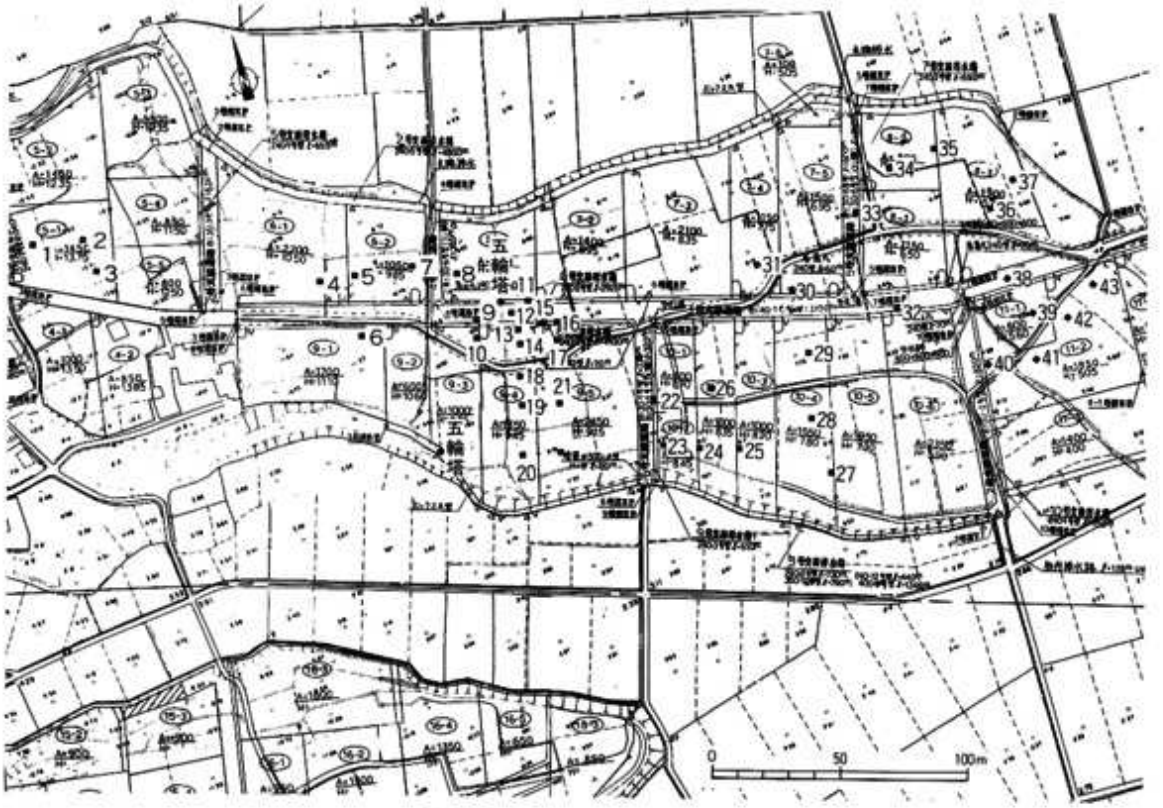
遺跡の南1.1kmには、昭和62年９月に発掘調査を行なった重藤遺跡が位置するが、この周辺では圃場整備事業が行なわれており、これに伴ない試掘、本発掘調査を続けてきた地域である。本遺跡もまた事業の対象となり試掘調査を行なった。

試掘調査の結果、中世の遺構、遺物が確認されたため、遺跡の取扱いについて当局と協議の上、削平予定地を発掘調査することになり、昭和63年末～11月まで国東町教育委員会の主体で実施した。以下、試掘調査の概要について述べる。



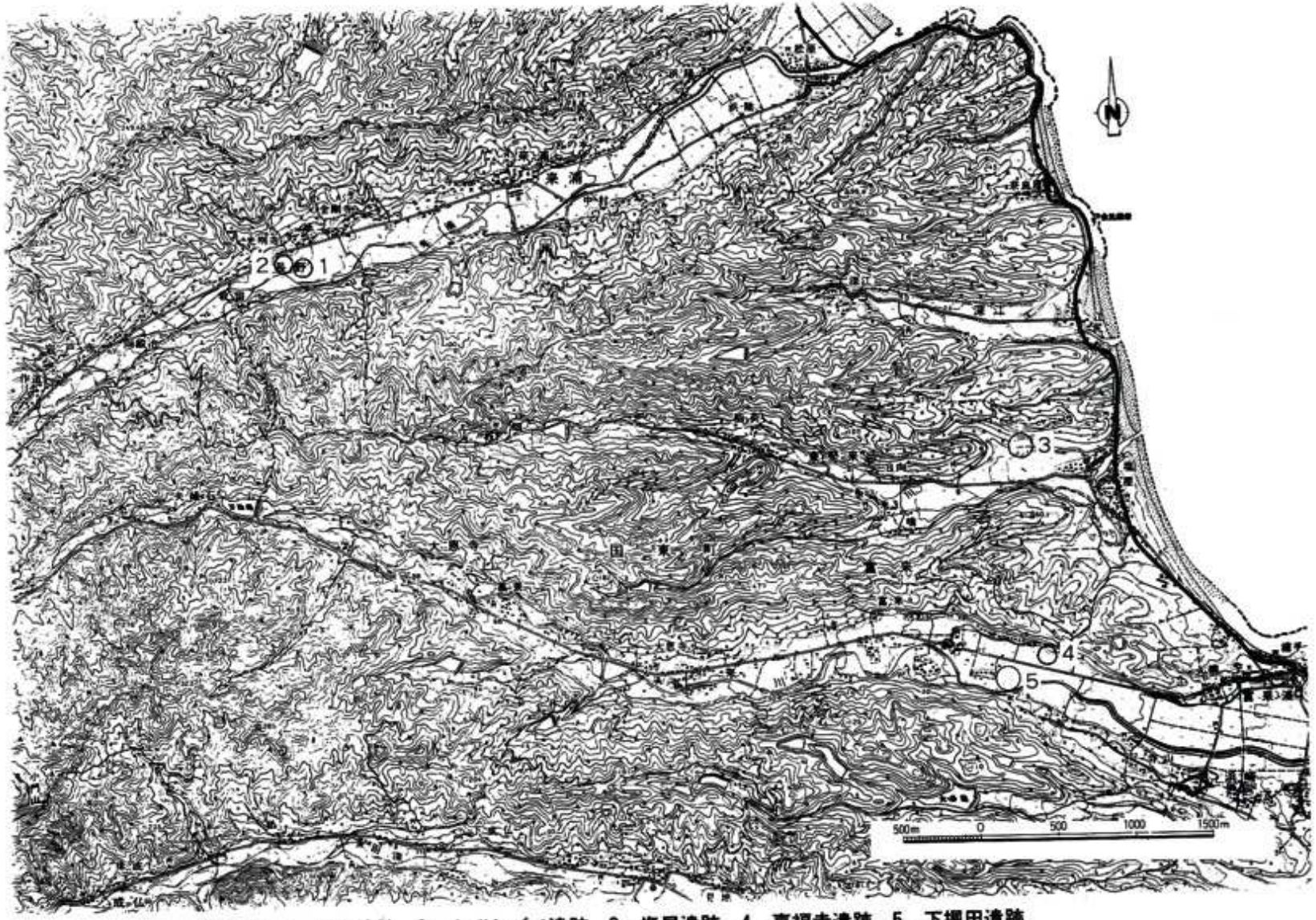
第６図　１．網井・下平遺跡

試掘調査は、2m×2mのグリッドを43個所設けて実施した(第7図)。1区～8区・18区～43区では、すでに地山のかなり深い部分まで削平されていたらしく、遺物・遺構は観察できなかった。しかし、9区～17区において、厚さ25cmの水田耕作土を除去し、更に水田床土（酸化鉄沈殿部）を5cm程除去した段階で遺構が観察された。遺構の種類は、掘立建物の柱穴で、直径15cm～30cmの規模を有していた。遺構内を調査しなかったので、遺物の出土はほとんどなかった。この為、遺構の年代は不明であるが、2～3の柱穴検出面で土師器の破片が出土したことで中世に属すると考えた。



第7図　網井下平グリッド配置図

調査は、以上のように、遺構、遺物の出土層位、分布範囲を確認した時点で中止し、保存あるいは本調査にゆだねることにした。なお、10月の国東町教育委員会による記録保存を目的とした発掘調査では、多くの柱穴群と土師器が出土した。（綿貫）



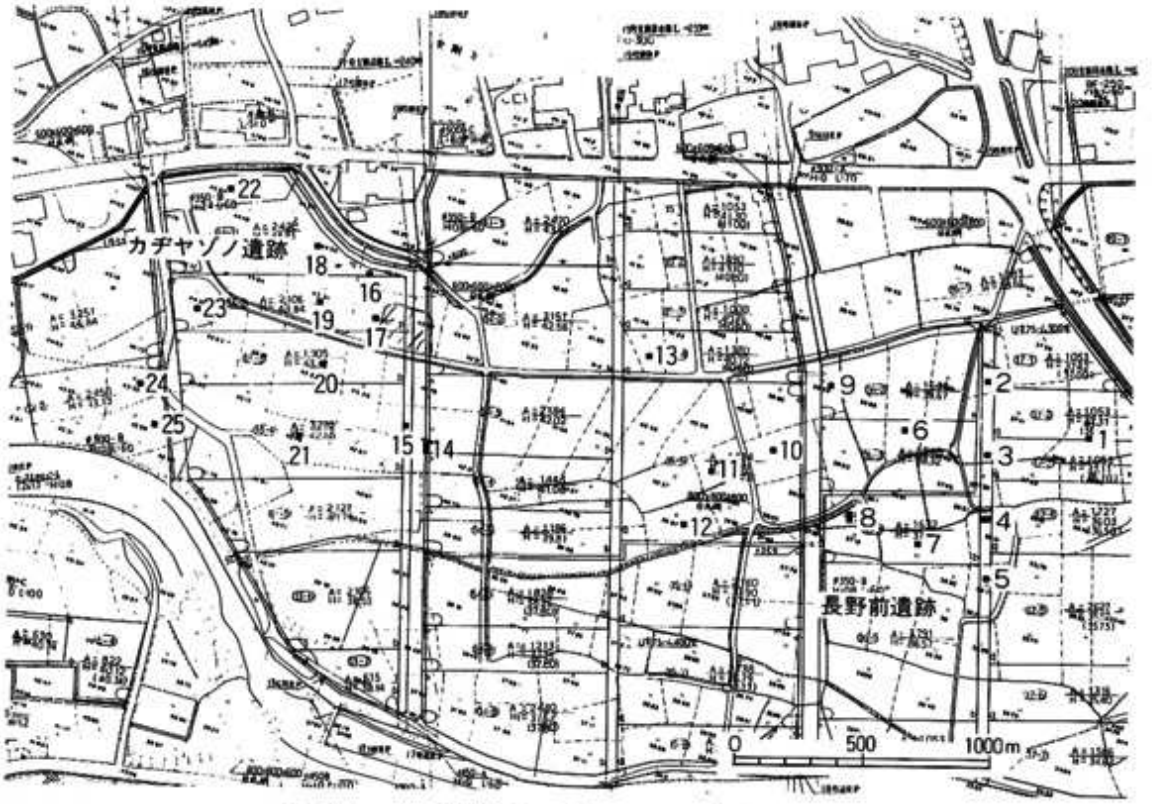
第8図　1. 長野遺跡　2. カヂヤゾノ遺跡　3. 塩屋遺跡　4. 喜福寺遺跡　5. 下堀田遺跡

6．長野前遺跡・カヂヤゾノ遺跡

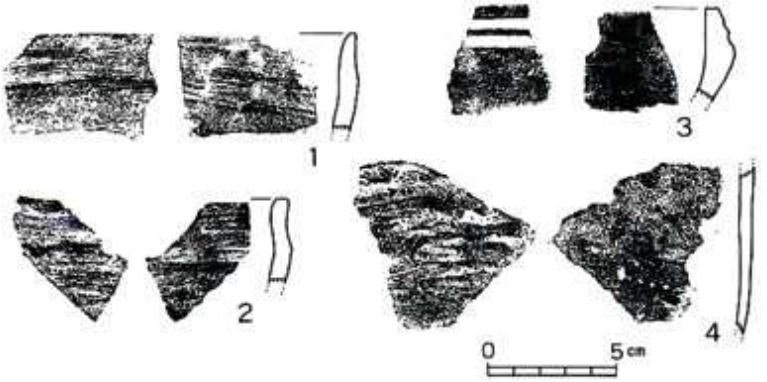
（国東町大字長野字長野前・カヂヤゾノ）

長野前遺跡とカジヤゾノ遺跡は、国東半島の東部国東町北部に位置する。国東半島は、両子山を頂点とし、尾根状の丘陵と谷が放射状に広がっている。谷は、下流になると広がり、小規模な沖積平野が形作られている。遺跡は、こうした谷の一つである来浦川谷の小さな河岸段丘上に立地する。標高44m～36mの間にある。長野前遺跡とカヂヤゾノ遺跡は、北から南へ南流して来浦川に流れ入る小河川をはさんで対峙している(第８図)。

長野前遺跡では、２ｍ×２ｍのグリッドを13ヵ所設けて試掘した。この結果、４区・５区・７区・８区・10区～13区で遺構・遺物が観察された。４区・５区・７区付近は、江戸時代頃屋敷があったと伝えられる水田で、付近に墓・井戸などが分布している。観察された遺構や遺物は、柱穴や肥前製磁器であることがら「屋敷跡」伝承に関連すると考えられよう。８区は、20cm～10cm大の河床礫が積まれた100m²程の石塚に設け、重機によって徐々に削った。 150cm程の深度で、石塚内より、100cm四方の焼土・黒色土・鉄滓がつまった土坑を検出した。10区～13区にかけては、厚さ25cmの水田耕作土の下部に厚さ30cm前後の黒褐色土層があり、多量の姫島産黒曜石と縄文時代後・晩期の土器片が出土した。（綿貫）



第９図　長野前遺跡１～13　カヂヤゾノ遺跡14～25



第10図　長野前遺跡10区、11区出土縄文土器

第10図の１・２は、内側にゆるく屈接する口縁の深鉢である。色調は黒褐色で焼成は良好である。素地には角閃石が混入している。調整は内外面ともにヘラみがき。３は、内側に屈接する口縁の深鉢である。外面には二条の平行凹線を有する。多量の角閃石と、微量の石英粒を含む。色調は両面とも黄灰色で、焼成は良好。調整はヘラみがき。４は、深鉢胴部破片である。外面は暗茶褐色、内面は灰白色で焼成は良好。素地に多量の角閃石を含む。調整は、条痕風の調整の後ナデによる。

カジヤゾノ遺跡では、14区～25区までの試掘グリッドを設けたが、ややまとまって出土したのは14区で、その他は姫島産黒曜石の剝片が１・２点出土するだけである。14区で出土した土器は縄文時代後期の西平式土器であった。

以上、長野前遺跡とカヂヤゾノ遺跡を概観してきたが、４区・５区・８区・14区は発掘調査が必要な場所であることが判明した。10区～13区は、包含層を若干削平するだけで、ほとんど保存できることが明らかになった。（綿貫）

7．塩屋遺跡（国東町大字富来）

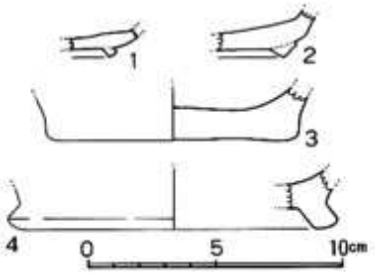
遺跡は、国東町北部の堅来川沿いに位置する。堅来川は、国東半島中央部から放射状にのびる尾根を海岸部付近で侵蝕した支谷を流れる小河川である。下流付近は、やはり沖積平野が広がっている。遺跡は、南に沖積平野を臨む丘陵の裾部に位置している（第８図３・第11図）。

塩屋遺跡は、２ｍ×２ｍのグリッドを14ヵ所設けて調査を実施した。遺跡付近は、すでに階段状に掘削されており、遺構・遺物の遺存状態は極めて不良であった。３区付近は「鬼塚」という地名が残っており、戦後まもない頃石棺が出土し中から頭骨が見つかったという。この頭骨は、現在塩屋集落内の共同墓地に改葬されており、朱が塗られていた。遺物が出土したのは７区～12区に沿うすでにカットされた道路断面からであり、その他12区で数片の土器片が見つかっただけである。

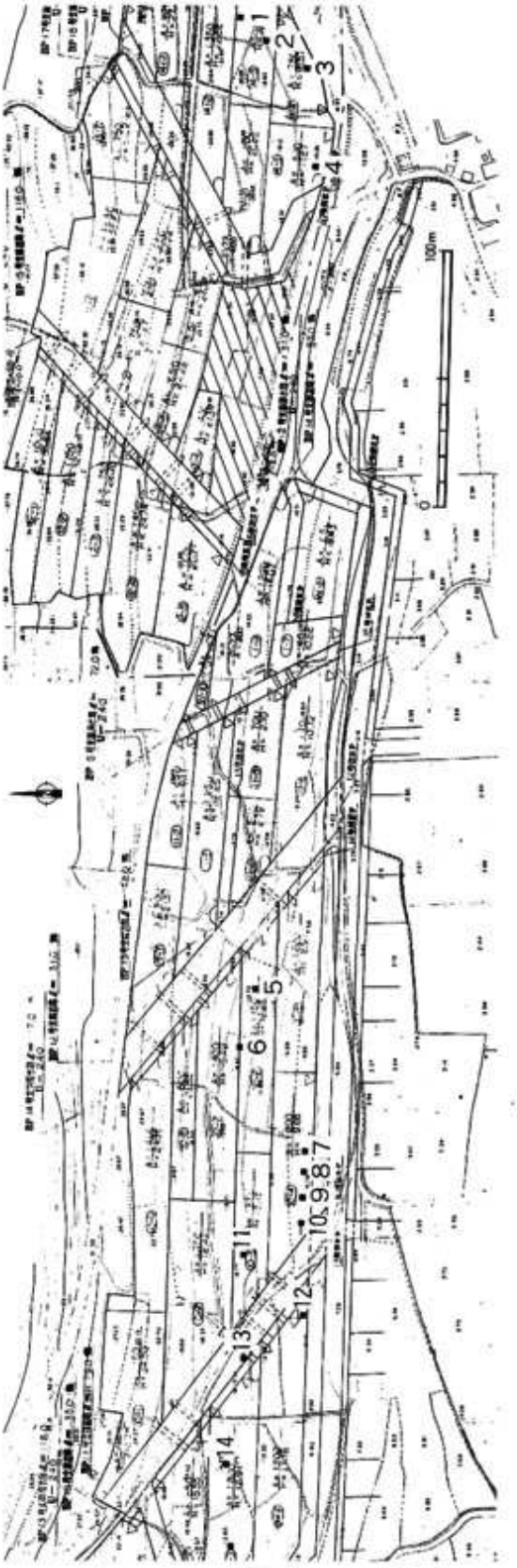
１・２は、須恵器の底部破片である。高台がついており、ロクロ仕上げで回転ヘラ削り。ともに焼成は良好。３・４は、焼成と遺存状態は不良の土師器である。素地に角閃石、長石を含む。調整は横ナデと思われるが、遺存状態が悪くはっきりしない。

遺物がわずかに出土したグリッドは、傾斜面上に立地していることもあって、遺存状態が悪く、ま

た遺構も観察されなかった。さらにこのグリッド周辺は盛土をする地区であるので全面的な発掘調査は実施しなかった。（綿貫）



第12図　塩屋遺跡土器実測図



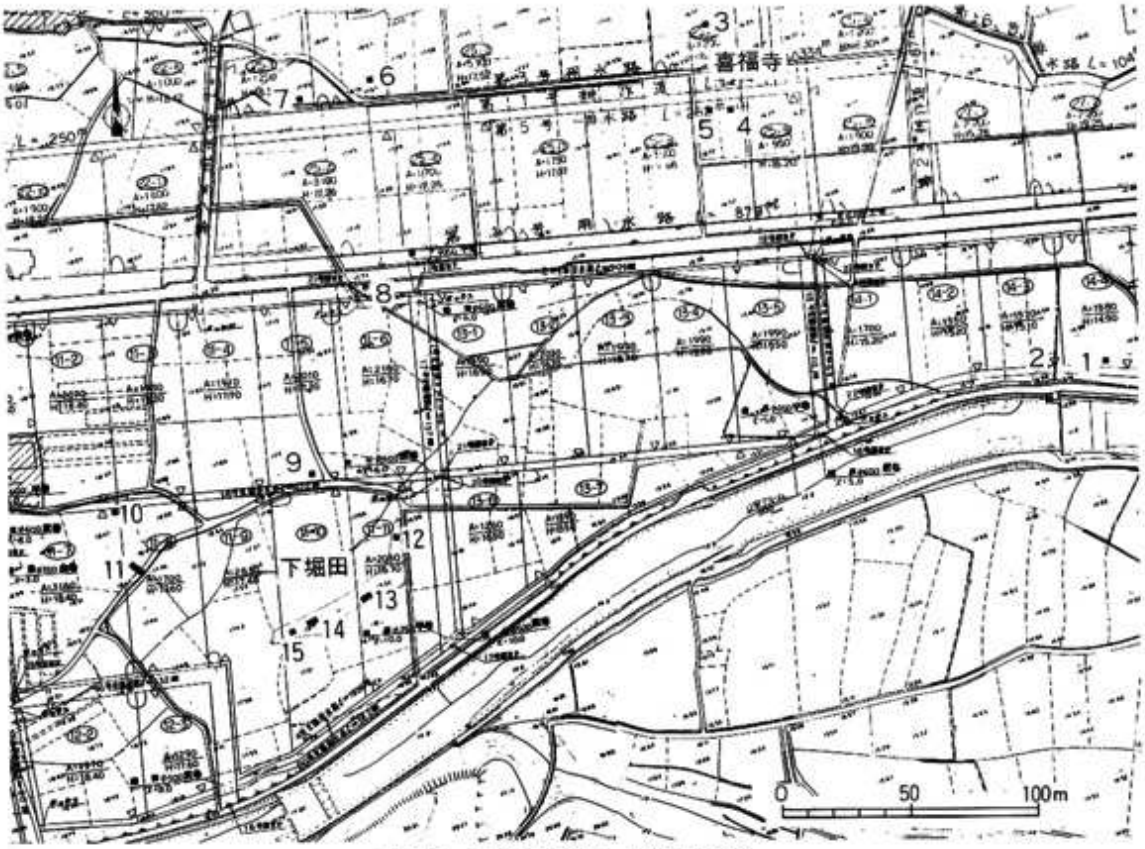
第11図　塩屋遺跡グリッド配置図

8．喜福寺遺跡・下堀田遺跡（国東町大字富来字喜福寺、下堀田）

喜福寺遺跡・下堀田遺跡は、国東半島中央から東流してゆく富来川沿いに所在する。富来川も、放射状に延びる尾根の間を流れる川の一つである。富来川は、国東町の中枢部がある田深川流域とは尾根一つ越えた南側に隣接している。中流部から下流部にかけては沖積平野が広がっている。遺跡は、河口から約1500m程上流へさか登った沖積平野上に位置する。喜福寺遺跡は山裾近くに立地し、下堀田遺跡は富来川の自然堤防上に立地する（第８図４・５）。

両遺跡を含め、２m×２mのグリッドを12ヵ所、２m×４mのトレンチを３ヵ所設けて対象地域の試掘を行なった。県道より南側一帯は、試掘坑を設けた以外の水田は、水量が極めて多く調査不可能であった。遺物が出土したのは、３区・12区～15区であった（第13図）。

喜福寺遺跡では、３区の２m×２mのグリッドから土器が20数片出土した（第14図）。１～８は、焼塩壺の破片である。１～３は口縁端部が指押さえによる整形の為に波状になっている。外表面は指頭圧痕がわずかに残り、内表面には布目痕がわずかに観察される。素地の中には、石英・長石粒を含む。４～８は焼塩壺の底部で、丸底となっている。外表面には、指頭痕が観察される。６は粘土紐つぎ目で破損している。１～８はいずれも磨滅が著しく、指頭痕や布目痕をわずかにとどめるだけであ

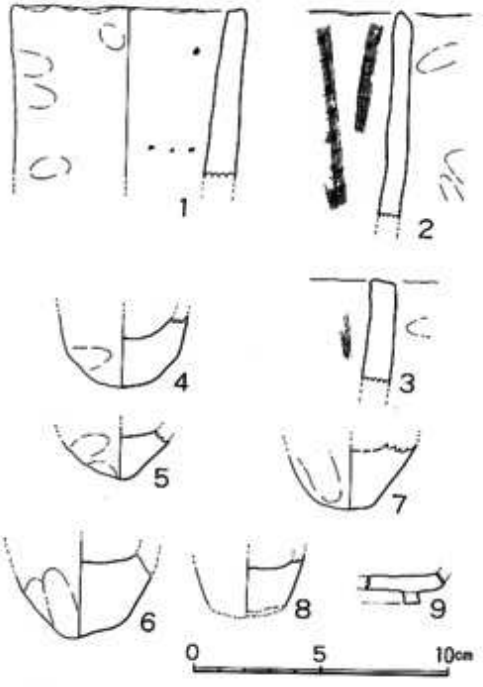


第13図　喜福寺遺跡、下堀田遺跡

る。9は高台付の須恵器である。こうした遺物の出土状態は、水田耕作土の直下の水田床にめり込んで出土しており、遺存と関係があろう。さて、製塩にかかわる土器には、甕形の玄海灘式塩製土器があるが、喜福寺遺跡においては可動性の高い焼塩壺だけが出土している。さて、通常製塩遺跡は海岸近くの砂丘上に立地しているが、現海岸から1500m離れた沖積谷に立地する喜福寺遺跡は、このようなことから製塩遺跡とは考えにくい。

以上のような焼塩壺の特徴と、口径が9cmに復元される点から福岡県観世音寺僧房跡出土例と同様のものと推定できる。したがって本遺跡の焼塩壺は、8世紀代に作られ利用されたものであろう。なお、焼塩壺の他に「玄海灘式製塩土器」などが出土していない。焼塩壺が出土した小字喜福寺は、中世に栄えた六郷満山末山末寺の喜福寺が所在した場所であるが、年代的にみて直接関係ないとみられる。ところで富来川谷と田深川の谷にはさまれた丘陵に桜本宮が、田深川の南の丘陵に桜八幡宮があり、両神社は宇佐八幡系列の神社として知られている。この両神社から、奈良時代の古瓦が出土しており、神宮寺が存在したことを窺わせている。更にまた、このあたりは郷制下の国東郷に当っており、中世初期に至るまで国衙領であった。ところで焼塩壺は、生産地以外では官衙・寺院から出土していることから、支配権と結びついた産業であるので、喜福寺遺跡の焼塩壺は宇佐八幡・郡衙との関係が考えられる。

下堀田遺跡は、町指定の古代「溜池遺跡」とされていたところである。溜池の堤防とされるところを中心に調査した。この結果、11区からは近代の石組遺構が出土した。12区～15区では、厚さ20cmの表土を除去したところ、砂層中から多量の縄文土器と中世の土師器が出土した。(第13・15図)

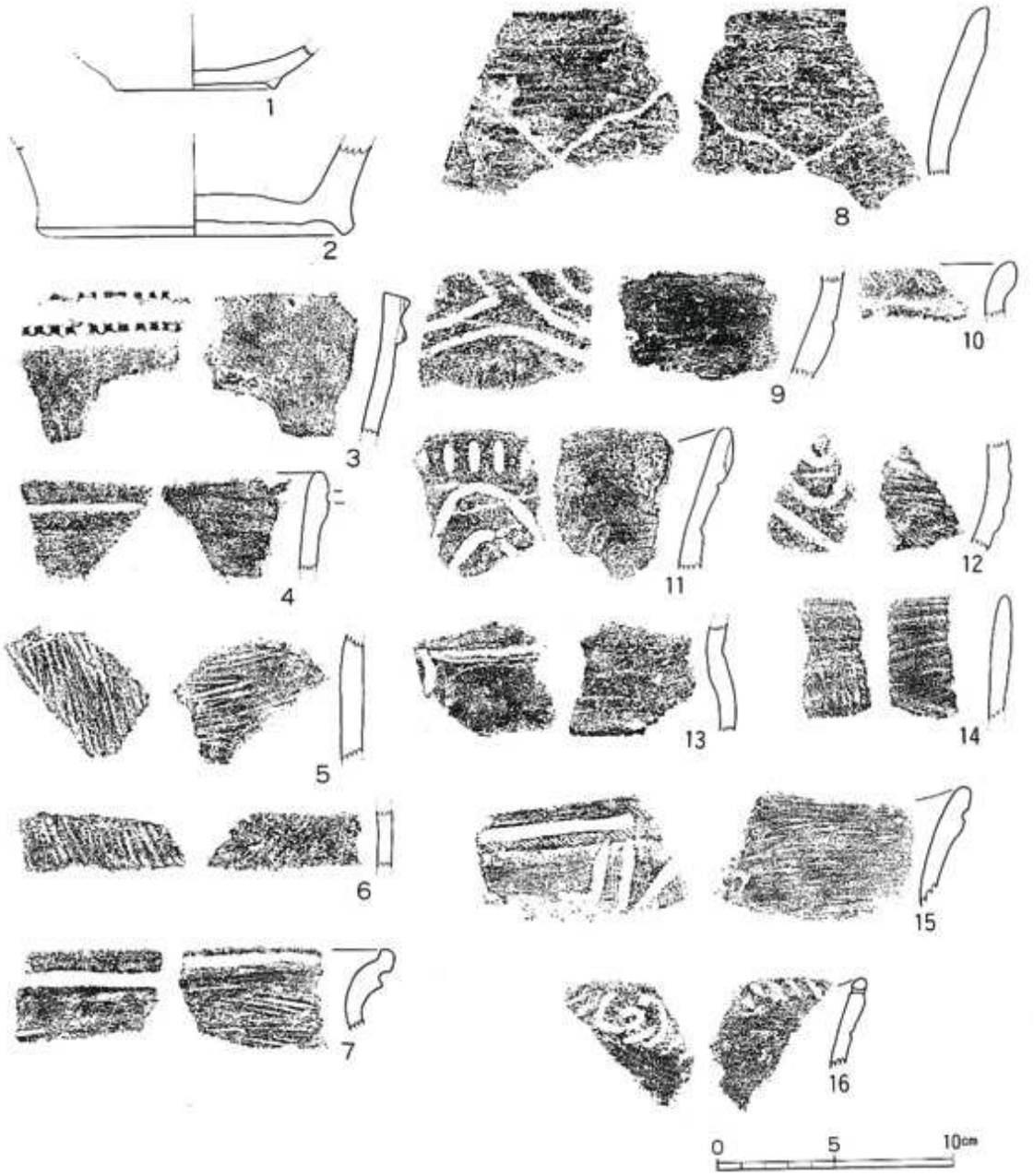


第14図　喜福寺遺跡出土土器実測図

1と2は土師器の底部である。1は甕で高台を有する。調整は横ナデによる。素地に、角閃石・長石を多く含む。2は碗で、ゆるやかに立上る。素地に、金雲母・角閃石・石英を多く含む。3は、弥生時代中期前半下城式土器の甕の口縁部である。口縁に二条の突帯を有し、ヘラによる刻目がある。4～16は、縄文時代後期に属する土器である。4はナデ調整。5・6は巻貝による条痕調整で多量の雲母と石英粒を含む。7は、外面ナデ、内面は二枚貝による条痕で、上部はその後磨いている。内外面両面に凹線が観察される。8は無文深鉢で、内外面横ナデによる調整。素地に、白い粒子と、石英粒が半々含むほか、微量の石英粒を含む。9は、深鉢の胴部である。内面はヘラ磨きで、外面は不明で

あるが凹線が観察される。黒雲母・石英を含む。10は、口縁部破片である。外面は縄文を施した後、ヘラ磨きをしている。内面もヘラ磨き。多量の石英粒、微量の雲母を含む。11・12は、凹線を外面に施している。内外面ともにヘラ磨き。凹線は曲線的である。13は頸部破片である。内外面ともにヘラ磨き。頸部に凹線を施した後、豆粒状の凹線を施す。素地は、黒雲母・石英粒を含む。14は、無文の口縁部破片である。外面上部と内面は横ナデで、外面下半は縦ナデである。15・16は、波状口縁の破片である。器形は外反する。15は、外面に横方向の凹線と縦位方向の凹線が観察される。内外面ともにヘラ磨き。16は、外面に入組文、内面上端部に刻目を並列させている。

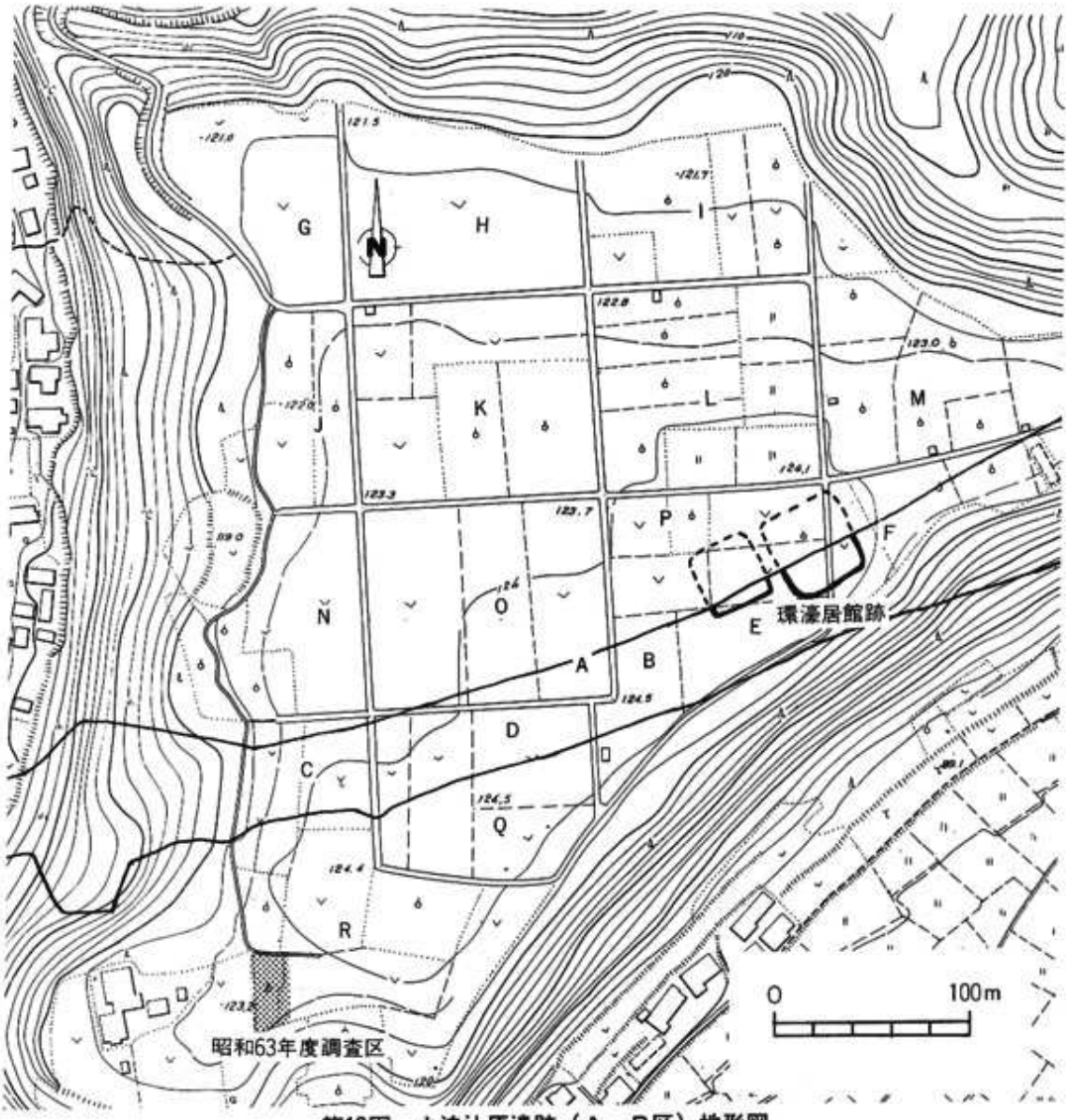
下堀田遺跡においては、上述のような土器群が砂層中から出土した為に、1月～3月にかけて圃場整備にともなう発掘調査が国東町教育委員会によって行なわれた。この結果、12区～15区を設定した「自然堤防」状の微高地は近世の護岸工事に関わるものであることが判った。（綿貫）



第15図　下堀田遺跡出土の土器

9．小迫辻原遺跡（日田市大字小迫字辻原）

当遺跡は日田盆地の西北部山田原台地の一部である通称辻原台地上に位置する。標高約120mを測る台地は、昭和30年代に大規模な農業基盤整備事業が行なわれ、今では一帯が畑地として利用されている。当台地の南側には吹上遺跡、東側には草場第二遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数存在する。小迫辻原遺跡は昭和60年度から九州横断自動車道建設に伴う発掘調査[註1]や農業基盤整備関係の発掘調査[註2]が進められており、中でも昭和62年度に実施された前者の調査では古墳時代前期の環壕居館2基が発見され注目されている。またこれ以外にも弥生時代の竪穴式住居跡や甕棺墓、土坑、古墳時代の竪穴式住居跡、中世の墓などが見つかっている[註3]。



第16図　小迫辻原遺跡（A～R区）地形図

今回の調査は、日田市内で実施されている地方増進事業に端を発しており、辻原台地南部のR区[註4]約700㎡を対象とし、2m×2mのグリットを21ヵ所設定した。(第　図)。 これまでの調査経過では、遺跡全体の残りがあまり良くないにもかかわらず、遺構の密度が高いことより、当調査区においても遺構の検出が期待されたが、B－4グリットで弥生時代と考えられる土坑一基、C－5グリットから同時代と考えられる柱穴1本を検出したにとどまった。表土にも土器が混ってないことを考えると遺構の密度の稀薄なところと考えられる。 (平川)

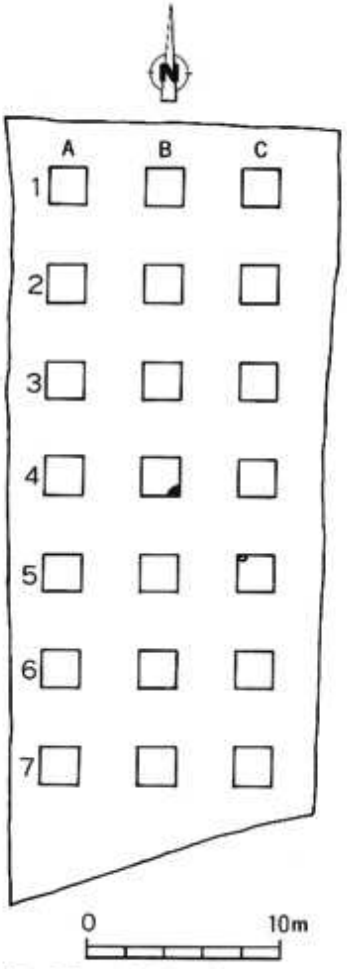
註 1)　大分県教育委員会　『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』　1986年～1988年

註 2)　大分県教育委員会　『大分県内遺跡詳細分布調査概報 7』　1988年

　　日田市教育委員会　『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ　1988年

註 3)　註1、註2と同じ

註 4)　区割りについては、当遺跡における発掘調査が、県教委、市教委によって長期的に予定されているため両教委担当者で第　図に示す通りの便宜的な地区割表示を行っている。



第　図　小迫辻原遺跡R区
遺構検出状況

調査区全景

遺構検出中

Ⅳ. ま と め

昭和63年度についても前年度と同様に県下全域にわたる分布調査と遺跡及び推定地の試掘調査を実施した。今年度はとくに東国東郡国東町において試掘調査が集中した傾向があるが、これは当町が県内では圃場整備事業面積が大きいこともその原因となっている。その結果縄文時代から近世にいたるいくつかの遺跡を明らかにすることができた。その中には、喜福寺遺跡の製塩関係の遺物、綱井下平遺跡の平安時代の掘立建物群等昨年度の重藤遺跡につづいて歴史時代関係の遺跡が検出された。国東町は古代の国東半島において、唯一国衙領（国前郷）となっていた地域であり、また郡衙の所在も推定されている半島の政治的中心地である。

カヂヤゾノ遺跡では縄文後期の遺物が広範囲にわたって確認されている。同様に姫島産黒曜石の剝片の散布も著しい。ただ、前年度の調査の羽田遺跡のような原石や大型の石核・剝片は検出されていない。これは内陸の消費型遺跡の典型を示すものと思われる。

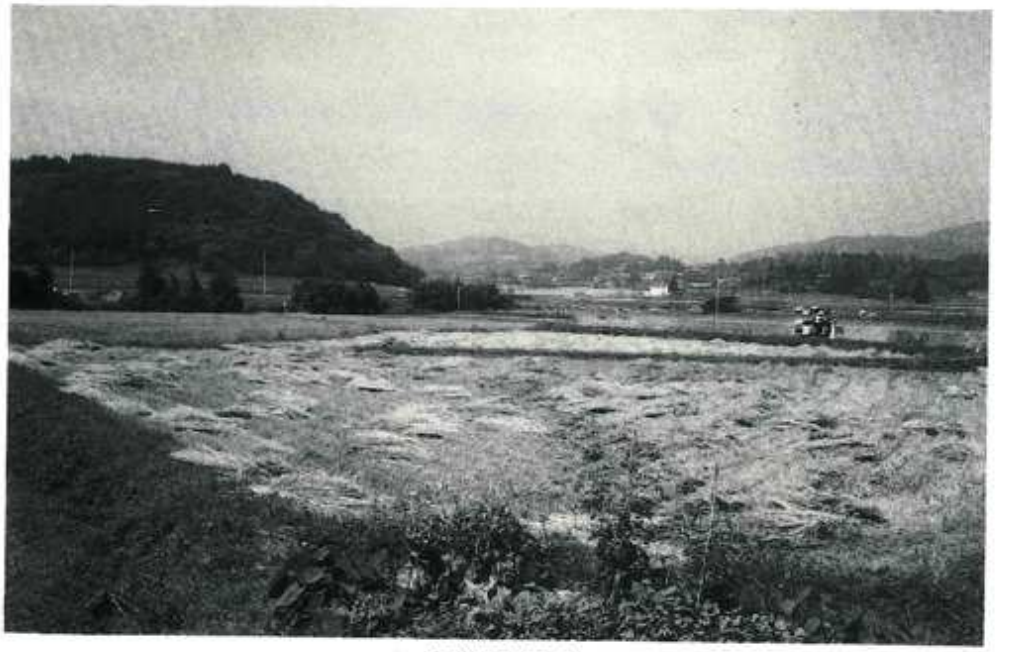
下堀田遺跡は、湧水を利用した溜池遺跡であり、古代の遺構と推定されていたことから町の指定史跡となっていたものであるが、調査の結果、近世の構築によるものであることが判明した。こうした小規模であるが一連の調査の蓄積によって古代の様相が明らかになっていくものと思われる。

このほか、上田ヶ森遺跡では、弥生時代中期とみられる組合せ式箱式石棺２基が検出された。一基は保存状態もよく、土地所有者の協力によって工法変更による現地保存をすることができた。山香町内ではこれまで石棺の出土例はあったものの、正式に発掘調査されたものは少なく、そうした意味では貴重な類例といえる。

日田市小迫辻原遺跡は昨年度の調査によって古墳時代前期の２基の居館跡が発見され、一躍注目をあびた。今回の試掘調査は居館跡の南西部の台地端部近くで実施したが、特記すべき遺構・遺物は検出されなかった。しかし居館の西部では、大型の濠遺構が検出されており、今後さらに台地全体の確認調査が必要となった。当地域はなお、小規模な開発が継続して予定されており、慎重な対応が望まれる。

平成元年度についても、ひきつづいて全県的な対応が予定されている。関係機関とできるだけ早い時期の協議を行い、遺跡の保護と開発事業との円滑化を図っていきたい。（清水）

仮宮遺跡近景



鴨川遺跡近景

吉松遺跡Ｄ地区作業風景(Ｅトレンチ)

同　上(Ｍトレンチ)

長野前遺跡試掘状況

カヂヤソノ遺跡試掘状況

大分県内遺跡詳細分布調査概報　8

平成元年3月31日

発　行　大分県教育委員会
印　刷　日の丸印刷株式会社